

KALS NEWSLETTER 71

2025年8月

九州アメリカ文学会

事務局 西南学院大学外国語学部外国語学科 藤野功一研究室内

〒814-0002 福岡県福岡市早良区西新 6 丁目 2-92

ご挨拶

九州アメリカ文学会 会長 大島 由起子（福岡大学）

あまりに完璧だった竹内勝徳前会長の後とあって、役不足ですが、会長を務めさせていただいております。遡れば 40 年以上前のこと、日本の大学院を出ておらず、留学後、「学会」なるものにおずおず行ってみた私でしたが、橋口保夫会長をはじめ諸先生方から温かく接して頂きました。友人にも恵まれました。学問の世界は、むろん厳しくもありますが、楽しくてたまりません。育ててくださった九州アメリカ文学会に恩を感じ、先人が築き上げた学会を大切に継承してゆきたいと心に期しております。

来秋には、九州で日本アメリカ文学会全国大会が開かれますので、皆様のご協力をお願いいたします。夢枕獯氏に特別講演をして頂ける運びとなり、わくわくしております。

蛇足になりますが、私が数十年前にハーバード大学の中央図書館近くのハルトン図書館を訪れたときのこと。今はどうなっているのか存じませんが、受付をしていると、すぐ左に入口が見えるホールに、様々な作家の肖像画が壁に掛かっている中、メルヴィル晩年の油彩肖像画（Herman Melville, 1870, by Joseph Oriel Eaton）が正面に見え、嬉しくて目が吸い付けられました。William H. Shurr の批評書の表紙をはじめ単色では馴染みの肖像でしたが、実物は、当たり前のことながら、彩色画でした。中年以降の男性としては頬の薄紅色が勝ちすぎている印象で、驚きました。私の研究対象メルヴィルは、いろいろな意味で私とは別世界を生きた人です。本当のところ何を語っているのか、想像を巡らすのも難しいですが、色のある世界に入って少しは本人の生気に触れるようになりたいと切に願ったことを思い出します。

私は、自分でも驚くくらい年齢を重ねてしまいましたが、研究意欲は若い頃と変わりません。むしろ、時間がとれなかった時期を経て、飢えたような気分です。これからも皆様と切磋琢磨してゆきたいものです。何かと心許ない私ではありますが、よろしくお願い申し上げます。

地区だより

《北九州地区》

齊藤 園子（北九州市立大学）

まず北九州アメリカ文学研究会からのご報告です。

第22回研究発表会（北九州アメリカ文学研究会）についてご報告致します。

日時：令和7年4月26日（土）14:00～16:30

場所：北九州市立大学 キャンパス内 本館D-402（4階）

[研究発表1]

論題：バン格拉ディッシュ縫製(RMG)産業におけるグローバルアパレル企業のCSR研究
——ラナ・プラザ崩壊以降の変容と課題を中心に——

発表者：長岡 節子（福岡女子大学博士後期課程社会科学専攻）

司会者：薬師寺 元子（北九州市立大学非常勤講師）

[研究発表2]

論題：『礼記』昏義篇からみる昏礼の意義

発表者：篠原 征子（西南女学院大学非常勤講師）

司会者：村田 希巳子（北九州市立大学非常勤講師）

両先生方の具体的で解りやすいご発表に対しまして、会員、学生、市民の参加者による沢山の貴重な質問に先生方は、非常に丁寧に、更に深くご解答下さいました。これまでになく、密度の高い研究発表会となりました。

齊藤は2025年5月にボストンで開催されたALA年次大会で研究発表を行いました。ホーソーンやオルコットをはじめ、作家名を冠したたくさんの学会が活動を行っており、活気にあふれた大会でした。その他、模擬国連関連で、“Negotiations in the Anniversary Year of the United Nations: What We Can Do for a Better UN and the World”（8月19日（火）開催）と題する講演・意見交換会を企画しました。学内外を問わずどなたでもご参加いただける機会にしました。2025年は国連創設80周年という節目の年です。グローバル社会のあり方を一緒に考えるよい時間になればと思っています。

[\[https://www.kitakyu-u.ac.jp/news/2025/07/005962.html\]](https://www.kitakyu-u.ac.jp/news/2025/07/005962.html)

《沖縄地区》

加瀬 保子（琉球大学）

沖縄地区会員の最近の研究についてご紹介いたします。

琉球大学の小林正臣先生の論文 “Appreciation and Speculation: On the Aesthetic of Melville’s ‘The Bell-Tower’” が、日本アメリカ文学学会が発行する *The Journal of the American Literature Society of Japan*, no. 24 に 掲載されます。こちらは、小林先生が本年度開始なされた科研課題「イシュメールたちの

思弁的ナラティブ：新たな『スペキュレイティブ・フィクション』論」の先駆けとなる論文で、近年の思想界における「美学的転回」(aesthetic turn)と「思弁的転回」(speculative turn)を同時に扱うことで、メルヴィルの「鐘塔」(“The Bell-Tower”)を新たな観点から論じるものとなっています。

加瀬自身の最近の活動についてもお報告いたします。先日アメリカの学術図書出版社 Vernon Press より、加瀬が編集したアンソロジー*Emerging from the Rubble: Asian/American Writings on Disasters* が出版されました。長年の友人である法政大学の小坂恵理子先生が共編者として出版までの2年間サポートしてくださいました。編者2人の他、明治大学の恩師 Gayle K. Sato 先生、アメリカ留学中 SUNY at Buffalo で世話になった Zhou Xiaojing 先生、その他アメリカ、インド、台湾の研究者合わせて総勢 11 名が transnational な視点をうけ、様々な災害をテーマにした Asian/American Writings の分析を各章でおこなっております。自身の編著のプロモーションになってしまい恐縮ですが、Vernon Press のサイトの他、アメリカの Amazon などでも購入可能です。ご購入希望の方がもしいらっしゃいましたら、加瀬(ykase@cs.u-ryukyu.ac.jp)までお知らせください。割引での購入(Vernon Press サイトからの購入のみ)が可能になります。

《熊本地区》

楠元 実子（熊本高専）

今年は厳しい暑さが続いておりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

熊本地区では、前回のご報告以降、3 回の研究会が開催されました。コロナ禍は落ち着きを見せつつありますが、自宅からの参加が便利な会員もおられるため、研究会は引き続きハイブリッド形式で実施が定着してきました。資料の直前配布や、発表者の PC 画面の共有といった柔軟な対応が可能となるなど、デジタル環境の利便性については以前言及したところです。さらに近年は生成 AI の進化が急速に進んでおり、研究会での紹介や活用など新たな可能性を探る試みも続けていきたいと考えております。

それでは、前回以降に開催された熊本アメリカ文学研究会の活動についてご報告いたします。

○第 169 回（2025 年 1 月 25 日）Zoom/熊本大学にて

題目： 老年期の日系 2 世女性のアイデンティティ：Julie Otsuka の“Dien Perdi”と Wakako Yamauchi の“So What; Who Cares?”より

発表者：楠元 実子

司会者：池田 志郎

病気を抱える高齢の日系二世女性を主人公とした短編小説が2編紹介されました。背景や共通点についての説明の後、作品中で老年期のアイデンティティ統合の課題がいかに描かれているかが分析されました。他者との交流や体験の共有、反復といった要素を通じて、受容と統合が達成されていく過程が明らかにされ、老年期においてもアイデンティティが深化していくこと、さらに記憶の継承の可能性についても言及がありました。また、Yamauchi によるこの短編と、未発表の戯曲版との違いについても紹介されました。

介護する側・される側それぞれの感情や、子よりも孫との関係が開かれている点など、共感を呼

ぶ内容だとの意見が多く聞かれました。文体や物語の展開・結末の描き方においても優れた技法が見られるとの評価がありました。議論は、父娘関係や老年期に残る記憶、ラテン語の用いられ方など多岐にわたりました。

○第170回（2025年6月21日）Zoom/熊本大学にて

題目：“The Blue Hotel”に見られる Stephen Crane の作家としての姿勢

発表者：田口 誠一

司会者：池田 志郎

Stephen Crane の生涯や代表作についての解説があり、「東部の男」と重なる部分についても触れられました。舞台設定や構図が“The Open Boat”と似ている点、ホテルの名称に込められた意味、色彩描写、スウェーデン人の奇矯な行動などが丁寧に分析されました。

最終章の必要性、西部と東部の対比、「死」は個人の責任なのか、あるいは連帯責任なのかといった多角的な視点からの読解が提示され、西部を見つめるまなざし、人間と自然との関係といったテーマなど、新たな視点を提供いただきました。

さらに、ホテルのモデル、オランダ人やスウェーデン人の歴史背景、自然の力、「青」という色の象徴性、洗練された表現や心理描写など、議論は広範囲に及びました。特に最終章に見られる多様な解釈には、Crane の卓越した作家的手腕が表れており、多くの参加者にとって非常に興味深い作品となったようです。

○第171回（2025年7月19日）Zoom/熊本大学にて

題目：異性装とセクシュアリティ——ルイザ・メイ・オルコットの“My Mysterious Mademoiselle”について

発表者：山本 幹樹

司会者：池田 志郎

Alcott の生涯と当時の社会的背景、そして今回取り上げた短編の概要についての解説がありました。彼女が匿名で大衆小説を数多く執筆し、それらがイギリスの雑誌などにも掲載されていたことが紹介されました。作品の分析では、「異性装」や「セクシュアリティ」の観点から、具体的な引用をもとに考察が行われました。

質疑応答では、女装を扱った作品、多様なモチーフ、トンネルの象徴性、英語表現やストーリー展開の巧みさなどについて活発なコメントが寄せられました。参加者からは、独自の深い読みも共有され、この巧妙に構成された短編をめぐって、有意義で刺激的な議論の場となりました。

なお、次回の第172回の会は2025年9月20日（土曜）に Velina Hasu Houston の“Kokoro (True Heart)”について開催予定となっています。ご関心がある方は、メールで楠元 (kusumoto@kumamoto-nct.ac.jp) までご連絡ください。

《鹿児島地区》

千代田 夏夫（鹿児島大学）

残暑お見舞い申し上げます。鹿児島地区では森孝晴先生（鹿児島国際大学）からいつも通り充実のご様子をお便りいただきました。以下森先生より。

．．．．．

去年はジャック・ロンドンの知人であった薩摩藩英国留學生長沢鼎の顕彰が進んだので、私は 2 本のペーパーを書きました。1 本は 3 月に発行された『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告 22』に掲載された「薩摩藩英国留學生の鹿児島における顕彰状況―顕彰進む 2024 年の長沢鼎の場合」です。もう一本は 6 月発行の『鹿児島国際大学国際文化論集』第 26 巻、第 1 号に掲載された「長沢鼎のワイナリーの航空写真とファウンテングローブ詩について」です。3 年前から進めているジャック・ロンドンの日本人使用人の日記に関する共同研究は、すでにいくつかの成果（同僚教授で共同研究者の 4 本のペーパーと私の 1 本）を上げていますが、このテーマでの私の新しい論文が 1 本、9 月頃に発行される『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第 26 巻、第 2 号に「ジャック・ロンドンの使用人中田由松の 1914 年 9 月から 12 月までの日記から見えるもの」と題して掲載されます。この研究は 11 月に私の勤務校の大学院研究科の公開研究会でもテーマとなることが決まりました。

．．．．．

鹿児島の地がジャック・ロンドン研究のまさに中心として世界に発信されてゆきます。

《長崎地区》

生田 和也（長崎県立大学）

まずは 5 月の九州アメリカ文学会の長崎大会にお越しいただいたみなさまにご参加のお礼を申し上げます。東アジアと欧米の文化的影響が混在する長崎の地で多彩な研究発表について議論を交わし、会員同士の親交を深める素晴らしい機会になったのではないかと存じます。

長崎地区では、長崎大学の鈴木章能先生、長崎外国語大学の山田健太郎先生に加え、今年度から同じく長崎外国語大学に黒木優介先生が着任されました。今回の学会開催を契機に互いに顔を合わせる機会が増えましたので、今後何らかの企画を立ち上げることができればと検討しております。また進展がありましたらご報告いたします。

2024 年度九州アメリカ文学賞 結果および講評

秋好 礼子 (福岡大学)

九州アメリカ文学賞

該当者なし

佳作

山口 沙瑛 (九州大学大学院博士後期課程 1 年)

Reading Eating Disorders: Exclusiveness and Transgressions in Toni Morrison's *Paradise*

(講評) 2024 年度は 3 篇の応募がありました。3 篇とも意欲的な論文でしたが、厳正な審査の結果、残念ながら、どの論文も文学賞の水準には至らないという結果となりました。しかしながら、うち 1 篇については、独自性の高い着眼点と精読を中心とした丁寧なアプローチを評価し、合議の結果、佳作といたしました。応募者全員に審査委員からの詳細なコメントを送付しておりますので、ぜひ今回の論文をよりよいものにし、別の形での発表に挑戦して頂きたいと願っております。2025 年度の応募要領は次号の Newsletter に掲載予定ですが、2026 年 2 月 20 日締切で、英語 4,000 字以下の論文を募集する予定です。学部生、大学院生の多くの皆様のチャレンジをお待ちしております。

九州アメリカ文学会 9 月例会プログラム

日時：2025 年 9 月 20 日 (土) 13 時 30 分～16 時 30 分

場所：福岡大学 文系センター棟 15 階 第 6 会議室

【研究発表】13 時 40 分～14 時 40 分

発表者：Ryu Ki (福岡大学・院)

Shared Lands, Separate Stories: A Comparison of *Little House in the Big Woods* with *The Birchbark House*

司会：銅堂 恵美子 (福岡大学)

【ワークショップ】14 時 50 分～16 時 20 分

批評検討会：マリアンヌ・ノーブル『19 世紀アメリカ文学の共感と接触を再考する』

講師：生田和也 (長崎県立大学)

講師：山口晋平 (宮城女学院大学)

内容：Marianne Noble の *Rethinking Sympathy and Human Contact in Nineteenth-Century American*

Literature (2019) の Introduction, Chapter 1, 2 (pp1-114) について登壇者が内容報告をし、参加者との議論を通して、エマソン、ソロー、ホイットマン、ホーソーンの作品における「共感」のテーマについて再考する。

文献：Noble, Marianne. *Rethinking Sympathy and Human Contact in Nineteenth-Century American Literature: Hawthorne, Douglass, Stowe, Dickinson*, Cambridge UP, 2019.

事務局からのお知らせ

藤野功一（西南学院大学）

本年度より事務局が西南学院大学に移りました。まだまだ不慣れのため何かと至らないところもあるかと思いますが、何卒よろしくお願い申し上げます。なお、昨今の情勢から、事務局での仕事を一大学のみで担うことが難しくなっておりますため、会費振込用紙発送と『九州アメリカ文学』発送につきましては、複数の大学で連携して行うこととなりました。2025 年度からの場合ですと、西南学院大学と会計担当の齊藤園子先生のいらっしゃる北九州市立大学で連携し、これらの作業を行わせていただきます。

西南学院大学からの 2025 年前半のご報告としましては、来日されたミシシッピ大学のジェイ・ワトソン氏による講演会「ウィリアム・フォークナーと現代社会」が 2025 年 6 月 12 日に西南学院大学にて行われました。KALS の会員の方々にも多数ご参加いただき、お陰様で聴衆は 100 名を超え、質疑応答も大変充実したものとなりました。講演会にご来場いただきました KALS の皆様に心より感謝申し上げます。講演を収録したビデオを、ジェイ・ワトソン氏のご了解をいただいて YouTube にアップロードしておりますので、ご興味のある方はどうぞご覧ください
(<https://youtu.be/uk6GsZRV9sU>)。

以下お知らせをいたします。

1. 2025 年度日本アメリカ文学会第 64 回全国大会は、2025 年 9 月 27 日（土）、28 日（日）に松山大学（文京キャンパス）で開催されます。
2. 日本英文学会第 78 回九州支部大会は、2025 年 10 月 25 日（土）、26 日（日）に鹿児島大学（郡元キャンパス）で開催されます。
3. 九州アメリカ文学会第 71 回大会は、2026 年 5 月 9 日（土）、10 日（日）に西南学院大学で開催予定です。
4. 2026 年度日本英文学会第 98 回全国大会は、2026 年 5 月 16 日（土）および 17 日（日）に同志社大学（今出川キャンパス）で開催予定です。
5. 今年度より、九州アメリカ文学会事務局は西南学院大学に置かれています。

〒814-0002 福岡県福岡市早良区西新 6 丁目 2-9 2

西南学院大学外国語学部外国語学科 藤野功一研究室内

九州アメリカ文学会事務局 電話:092-823-4433

会費に関する問い合わせは齊藤園子先生(saitos@kitakyu-u.ac.jp)、会費以外の件に関する問い合わせは藤野(k-fujino@seinan-gu.ac.jp)までお願いいたします。

《2025 年度役員・委員名簿》

会 長	大島 由起子（福岡大）
顧 問	小谷 耕二（九州大名誉教授） 早瀬 博範（宮崎国際大） 高橋 勤（九州大名誉教授） 竹内 勝徳（鹿児島大）
事務局長	藤野 功一（西南学院大）
幹 事	〈例会担当〉松下 紗耶（九州国際大） 〈例会担当〉毛利 優花（福岡大） 〈大会担当〉鈴木 一生（九州工業大） 〈九州アメリカ文学賞担当〉永川 とも子（九州大） 〈ニュースレター担当〉生田 和也（長崎県立大）
会 計	齊藤 園子（北九州市立大）
監 査	鈴木 章能（長崎大）
編集委員長	永尾 悟（熊本大）
本部代議員	大島 由起子、藤野 功一
本部大会運営委員	高橋 美知子（福岡大）
本部編集委員（支部選出）	樋渡 真理子（福岡大）
本部サイト運営委員	中村 嘉雄（九州大）
編 集 委 員	永尾 悟 生田 和也 楠元 実子（熊本高専） 肥川 絹代（元近畿大教授） 齊藤 園子 吉田 希依（熊本県立大） Greg Bevan（福岡大） Wayne Arnold（北九州市立大）
地区委員	齊藤 園子 鈴木 繁（佐賀大） 生田 和也 楠元 実子 井崎 浩（宮崎大） 千代田 夏夫（鹿児島大） 加瀬 保子（琉球大）
支部サイト運営委員	小林 正臣（琉球大）

野田壽先生ご逝去のお知らせ

大島 由起子（福岡大学）

九州アメリカ文学会会長（1995-2000）として多大なるご貢献くださいました野田壽先生が、3月30日に逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。ディキンソン研究（『ディキンソン断章』英宝社、2003）でご著名でした。

一個人としては、先生が九州工業大学の後しばらく福岡大学にお務めでしたご縁を大切に、学問の厳しさを忘れないでいこうと思っております。泰然とした佇まいでしたが熱いところもおありの先生でした。退職時にくださった大ぶりのアフリカの木製お面が、研究室で、すぐ下にあるコンピューターの無機質さを和らげております。お教え頂いた言葉の吟味はなかなか身に付きませんが、感謝に堪えません。

編集後記

今号より編集委員が交代となりました。これまで Newsletter 発行にご尽力いただいた前委員の江頭理江先生に、会員を代表しましてお礼申し上げます。今後の Newsletter の内容については、従来の形式を踏襲しつつ、学会の魅力をお届けできるように時には柔軟に対応していきたいと考えております。みなさまのお力添えをよろしくお願いします。（生田）